この素晴らしい錬金術士に至高のパイを！

玄米ほうじ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アーランドにおいて稀代の錬金術士と謳われたロロライナ・フリクセルは、長期任務に向かう途中でその命を落としたのだが、死後の世界で異世界転生を勧められ、そのまま現世にＵターンした。

全てはまだ見ぬパイの為……否！まだ見ぬ素材！錬金術の発展の為に!!

特典としてアーランドのアトリエを持って行くことを決めたロロナは、はじまりの街・アクセルへと降り立ったのだった。

目次

プロローグ ―― 1
ロロナとカズマ ―― 8
ロロナの仕事 ―― 23
ロロナとウワサ ―― 31
ロロナと錬金術 ―― 37
ロロナの師匠（アトリエｓｉｄｅ） 44
ロロナの友達 ―― 55
ロロナとパメラ ―― 73
ロロナの番外① ―― 86

プロローグ

気づいた時には、私はその空間にある椅子に座っていた。

木製のソレはある程度頑丈に造られているらしく、重心を移動しても軋む音はしない。ただ椅子の脚が床と擦れるようにガタガタとなるだけ。

無音が続くその空間での唯一の音を私は椅子を使って奏でる。最初は見覚えのない空間にほんのちょっと不安だったのだけれど、なんだか楽しくなってきた。

バッタンバタン

——そういえば、さっきまで船にいたような……

バタンバタン

——東の大陸の調査依頼が……

バタッバタッ

――見たこともない魔物とか、素材とか、パイとかあるのかなあ

バタン、バタ……ドサッ

「いたーい!!」

「ロロライナ・フリクセルさん?」

「いたーい!痛すぎるよぉ!」

椅子で遊んでいたらそのまま倒れてしまったみたいで、お尻と背中がジンジンする。

あれ?そういえばどこからか声が聞こえたような。

見られちゃってたのかなあ。恥ずかしいなぁ。師匠みたいな人じゃなきゃいいんだけど……

もう10年近く見ていない師匠の愉しそうな表情を思い浮かべながら、私は立ち上がった。

すると目の前には銀色の髪のシスターのような格好をした綺麗な女の子がいた。

「あれ?あなたは?」

アーランド、アールズ、アランヤ村、アーキュリスなどを転々と旅してきたけど、見たことない綺麗な銀髪碧眼の女の子が苦笑いしていた。

先ほどから声をかけていたんですが……と言って、その子は続けた。

「ようこそ死後の世界へ。私は新たな道を案内する女神エリスです。
ロロライナ・フリクセルさん、あなたの人生は残念ながら先ほど終わってしまいました。」
「えええええええ!!!私、死んじゃったんですか!!?」

なんで!?どうして???

「東の大陸に向かう途中、船の中で調合?をしていたのは覚えてますか?」
「はい。パイのストックが切れそうだったので」
食べたかったし。錬金術でパイを作った方が実際に作るよりも美味しいんだもの。
「荒波に揺れた際、錬金釜?の薬品が全てロロライナさんに被ってしまい」
薬剤を全身に被って死んじゃったの??

「粘性があったようでして、足元を掬われて後頭部を直撃してしまったようです。
打ち所が悪かったらしくって、そのままお亡くなりに……」

今までたくさん危ないところにも行ったし、みんなとドラゴンを倒したりしてきたのにそんな死に方って……
エリス様は私を見ながら戸惑いがちに続けた。

「ロロライナさんには3つの選択肢が用意されています」
エリス様が人差し指を立てた。
「1つ目は今までの記憶を消し、1から元の世界で人生をやり直します」
続けて中指を立てた。
「2つ目は天国のような何もないところで、何もしないでのんびりと暮らします」
次は薬指を立てた。
「3つ目は記憶はそのままで異世界に転生して魔王を倒す……の3つですね」
天国がいいなあと思うけど、そこでもパイは食べれるのかなあ
「ちなみに天国ではなんの娯楽もなく、皆さん日向ぼっこしか出来ません」
天国はダメだね。うん。パイが食べれないし錬金術が出来ないなんて考えられない

よ！パイが無いなんてありえないよ!!!

「だったら3つ目かなあ。魔王って怖いけど」

ドラゴンを倒してきたけど、それは仲間のみんなが助けてくれたからで。私ひとりじゃウルフだって倒せるか分からないよ……

私の表情を察してくれたのか、エリス様は微笑んで告げた。

「どんな才能でも、モノでも一つだけ、向こうの世界に持って行く権利があるんです！」

「うーん……モノってどんなものでもいいの？」

「ええ。中にはランダムにモンスターを召喚し、使役できる神器を持って行った人もいらっしゃいます」

「すごーい！素材たくさん採取できるなんて!!」

ドラゴン素材たくさん取れるなんて！調合しがいがあるなあ～

「ただ、同じ神器は存在できない為、違うモノになるんです……」

申し訳なさそうに言うエリス様。そうだよね。そんなに甘くはないよね……

でも、それならば特に気になる神器は無いかも。

私はダメ元でエリス様に提案してみた。

「では、アーランドにある私のアトリエをそのまま持って行くことってできますか？」
「え、それでいいんですか??」
「はい。私って錬金術しか取り柄ないし……」
師匠からはダメっ子って言われるし、ステルクさんからは肝心なところが抜けていると言われるし。
「今まで錬金術で作った道具でモンスターを倒してきたし、使い慣れた道具だったら安心だなーって」
「……わかりました」

エリス様はそういうと、「ちょっと待っててくださいね」と言い、席を立った。

＝＝

１０分後、肩で息をしているエリス様が戻ってきた。
「ロロライナさん、これを」
そういって渡してきたのは、羊皮紙だ。文字のような絵のような羅列で埋められていた。

「エリス様……これって……」
「ええ。アクセルという街の土地の権利書d「なんて読むんですか??」」
エリス様は「ああ、そうでしたね」とほほ笑むと私の頭に触れた。途端に私の足元に魔方陣が出現し光が溢れだしてくる。
「大丈夫ですよ。異世界の言語知識を置き換えを行いますから
……ただ失敗して記憶がゴッソリと無くなる可能性もありますけれど」
ボソッと呟かれた声は何だったのか聞こえない。
翻訳の錬金術アイテムを作ろうと思ったけど、しなくてもいいみたいでちょっと安心したなぁ。
「さぁ、勇者よ。願わくば、数多の勇者候補の中から、あなたが魔王を打ち倒す事を祈っています。……さあ、旅立ちなさい！」
足元の魔方陣の光が、私を包み込んだ。なんだかトラベルゲートを使っているような浮遊感がした。

ロロナとカズマ

今までででロロライナ・フリクセル程数奇な人生を過ごした者はいないだろう。

幼い頃、流行り病に罹ってしまった両親を錬金術士に救ってもらったことを機に、弟子入り。

彼女が錬金術を学び始めたのはその数年後。国からアトリエの取り潰しの危機に陥ってからだった。

アトリエが存続する為には、3年間3か月ごとに王国から出される課題をこなさなくてはならず、失敗したら即アトリエは閉鎖となってしまう。

王国の課題にやる気がない師匠により、アトリエの所有権がロロナに代わって(押し付けられて)から、彼女の人生は大きく変わった。

３年間で課題をクリアでき、ロロナはアトリエでパイ職人になったり、王様お抱えの錬金術士になったりもした。
どれも短い期間ではあったものの、その後、錬金術を広める旅に出て弟子をとった。

その弟子と錬金術の学校を立ち上げたりもしたのだが、独特の感性がたたってか長く続くことが無く……というか弟子の方が分かりやすいから先生を代わって！と子供たちから言われて大分へこんだ。

３０代になる前、何故か師匠から『３０代のロロナとか誰が得をするんだ！私は見たくない!!』といった暴論を振りかざした師匠によって８歳にされてしまった。
今までの記憶と、当時の記憶は消されているが、パイ屋さんを経営したことはなんとなく覚えている。確かアールズの宰相御用達のパイ屋にまでなっていたはずだ。いや、最初っからだったかもしれない。

閑話休題（そんなことよりパイ食べよう）

異なる世界での錬金術士、魔術師、賢者、騎士を育成する学校に迷い込んだこともあれば、異世界の辺境の村を発展させる管理官の協力者の一人にもなった。

錬金術に携わってなければ恐らくだが異世界に行く。なんてことも、年齢が変わる。なんてことも、何故か未来の弟子が会いに来る。なんてことも無かっただろう。

「今までいろいろあったけど、転生は初めてだなぁ～」

そんな不思議な経験をしたロロナが転生したところで、動揺なんてするはずもないのである。

「でも、なんで若返ってるんだろう……」（薬飲まされてないのに）

全ての始まりである13歳の時の姿になるのも、ロロナの不思議人生にはデフォルトみたいなものなのだ。

＊＊＊＊＊＊＊

佐藤和真は頭を抱えていた。金が無いのだ。

ファンタジー世界の第一歩としてのギルド登録。それには料金が必要だった。

金が無ければ何にも出来ない。現代社会と一緒だ。世知辛い世の中である。

傍らにいる特典の女神は、この世界の通貨なんて持ってないと言う。

初期費用も持たせないなんてなんて世知辛い世界なのだろうか。カズマ少年は心から嘆いた。

８個のバッジを求めて１０歳で１人旅をする少年少女だって３０００円以上は持っているのに!!

現代日本。しかも引きこもりしていた彼にとって、初対面の人にお金を借りようなんて難易度は高かった。

特典（アクア）はプリースト達に話しかけている。

自身をアクシズ教の女神と名乗り、お金を求める姿は尊敬しなくもないが、胡散臭い言動と、態度で人々から避けられていた。

「お金ないの？」

「ん？」

声のする方を見れば、カズマより小柄な少女がカズマを見ていた。

ピンク色の帽子、丈の短いマントを羽織った少女だ。年は大体１３、４歳に見えた。

少女が手にしているカゴからは美味しそうな匂いや何故か火薬の匂いもしていた。

見た目は可愛らしい少女なのだが、危険な匂いがする少女に、カズマはほんの少し警戒する。

「登録料払えなくて困っている人、よく見るから。もしかしたらあなたもかなーって」

「あ、ああ。オレと、オレの連れの2人分……」

カズマは未だ他のプリーストにたかっている女神を指さした。

絡まれているプリーストからは『お前の連れだろ。どうにかしろ』と言わんばかりの表情でこちらを見ているが、カズマは気にしないことにした。きっと気のせいだろう。

「じゃあちょっと付き合ってもらってもいいですか？」

「ファッ」

＊＊＊

「……って森にかよ!!!」

「ッ!!?どうしたんですか??」

森だ。

３６０度、どう見渡しても森だった。

青い、猫型リュックに植物や土、鉱物をどんどん詰め込んでいくピンク色の少女――

出発前に、ロロライナ・フリクセルと名乗り、ロロナと呼んでと言っていた――がオレのツッコミに驚いて声を上げた。

アクセルの街を出て、草原を越えた先に生い茂る森があった。

道中デカいカエルがいたが、ロロナが貝殻の笛を吹きながら歩くと、カエルは地面に沈んでいった。

戦の合図を送る法螺貝のような音なのに、音色を聴いたカエルたちは眠っているのである。なんでこんなでっかい音聴いて眠れるんだよ。異世界だから？

まぁね、ロロナの『付き合って』発言はね、会話の流れ的に男女のお付き合い的なそういうアレじゃないってことぐらいオレにだって分かるんだよ。

でもさ、夢見たっていいじゃん！かわいい女の子にそんな風に一度言われてみたいじゃん!!!

「なんかカズマさんからそこはかとなく夢見がちな童貞臭がするわ」
「どーてぇー？」
うっさい駄女神!!意味の分かってなさそうなロロナにそんなの教えようとするな！
「でもロロナ、良いのか？」
会話の流れを無理やりにでも変える。
こちらを振り向いて、小首を傾げるロロナ。そんな小動物のような彼女に見せるように手に持っていたバスケットを持ち上げた。
「ただ採取に付き合うだけで爆弾とか薬とか、金までくれるなんてさ」

そう、それは酒場での『付き合って』発言の事。
説明不足なロロナに代わり、受付のお姉さんが説明してくれたのだ。
このロロナは『登録料が足りない人々にカンタンなお仕事を斡旋している』んだそうだ。

登録されている中でもたった一人しかいない『錬金術士』というジョブについているロロナは、材料を採取しに町の外に出かけたりするのだとか。

ロロナが採取している間にモンスターに襲われないよう、護衛をするのが今のオレ等の仕事。

装備品は錬金術で作ったものを一時的に借りている。爆弾や薬はプレゼントなんだとか。

その上オレ達は依頼料として２０００エリス先払いで貰っており、ギルドの登録もすでに済んでいる。

ジョブ？基本職の冒険者だよ。ちきしょーめ。

ちなみにアクアはアークプリーストになった。知力と運が極端に低いと評価されていたのが気にはなるところである。というか女神なのに人間より知力低いっていいのかよ……。

ゲームとかでも神サマ系統って人間より賢いってイメージだったんだが実際はそうでもないんだな。

まあ、そのアクアはロロナからお金を貰った後仮病使おうとしてサボろうとしてた。
堂々とした契約破棄っぷりにロロナまでもドン引きしていた。結局そんな空気に耐えかねて依頼に参加はしているんだが、これから先この駄女神と一緒でやっていけるのかが不安である。

閑話休題

「うん！その道具の感想を後で聞かせてくれたらそれでいいよ！今後の改良点が見つかるかもだし」
裏表のない綺麗な笑顔でそういうロロナ。アクアよりロロナの方が女神っぽい。
「なによカズマさん。今、なんか失礼なこと考えてなかった!?」
「ソンナコトナイヨ」
そんな追求はスルーに限る。

＊＊＊

端的に言えば、爆弾の殺傷能力は凄かった。
若草色の絨毯のような大地は、何故か赤黒い血痕の痕とモザイクフィルターをかけておきたい物体がちらほらある。
ロロナから支給された『クラフト』と名付けられてた黄色いトゲが付いた爆弾の威力でこうなってしまったのだ。
転生初日にしてスプラッタな風景にＳＡＮ値がゴリゴリ削られている気がする。
アクアが魔法を使ってモザイクや赤黒色を洗い流したりしてくれなければ、どこかで戻してたかもしれない。

まだカゴには『フラム』と『レヘルン』、『メテオール』とロロナが言っていた爆弾が残っている。
効果の説明も同時にしてもらっていたので、比較的安全そうなクラフトを使ったのだが、結果は上記の通りである。
他の使うの怖いんだけど!!
早く帰りたいところだけど、ロロナはまだ採集していた。……あれ？モザイク拾ってない？

――うん。オレは何も見てないぞー！　異世界の空も青いんだな！

「カズくん、アーちゃん、爆弾の音で他の魔物も寄ってきそうだから場所を移動しない？」

「もう『アーちゃん』なんて呼ぶの止めてよね！私、女神よ！高貴なる水の女神アクア様なのよ！そんなと、友達の愛称みたいなぁ～、気軽そうなぁ～呼び方なんて止めてよね！」

「あ、ああ。結構デカい音だったよな……

ロロナ、他の爆弾もそうなのか？」

今まで友達いなかったのかこの駄女神……

とても嬉しそうな表情してるんだが。

誰得のツンデレなのか分からないデレ方をしているアクアは放っておいて、オレはロロナに爆弾の音について質問した。

「う、うん！一番控えめなのがレヘルンかなぁ周囲を凍らせて出来た氷柱を破壊する音が少し大きいと思うけど」

氷柱の大きさによってはレヘルンも音がデカそうだな……

狭いところでは使えなさそうだ。

ロロナはアクアの方をチラチラと見ながら、哀しそうに眉を下げた。
この反応、アクアの照れ隠しを真に受けてしまった感じか？
「あ、あのねアクアちゃん。さすがに女神を名乗るのは良くないと思うの」
「違うわよ！私ほんとーに女神なんだもん！ウソついてないもん!!」
そんな大泣きしながら言うアクアには、女神のような神聖さはまっっっったく無かった。
人間味しか感じない。
呼び方を変えていることにも気づいていないみたいだ。
「あああ！ごめんね！アクアちゃん!!イイコだから泣かないで～～！」
ロロナはパイをアクアに渡し、小さな子をあやすように背中を撫でた。
「う”～～～呼び方戻さなくていいのに
あ、これ美味しい！ねえロロナ！他にもないの？」
コロッと泣き止んでアクアは次のパイをたかる。
なんだか小さな子をあやす母親のような感じだ。ロロナの見た目はオレより年下そうなのにな。

「たかるな！　さっさと行かないと魔物が……」
草をかきわける葉擦りの音。荒い呼吸。イヤな予感しかしない。
振り向く寸前、ロロナが杖を振る。
「『エンゼルスピリット』!!」
白い光のようなモノがロロナの杖から発射されて、コボルトに直撃。
反動で仰け反ったコボルトに追撃するように、ロロナは一歩前に踏み出し、カゴの中からトゲトゲしたモノを投げた。
見た目が栗みたいなソレは、何故か小さく爆発し、オマケとばかりに杖でコボルトを殴った。
爆弾などの勢いもあってか、コボルトは木に叩きつけられた後、動かなくなった。
流れるような一連の展開にオレはついていけない。
っていうかロロナさん護衛要らなくない？超強いじゃん。
ロロナは軽い足取りでコボルトに近づき、合掌。そしてオレ等の方を振り向いていい笑顔で言った。
「今から解体するから周囲を見てて」
血の気がヒュンって引いた。

あ^～空が青いんじゃあ

ロロナの仕事

冒険者の始まりの街として知られるアクセルには、一軒のアトリエがある。
傾いたフラスコをモチーフにした看板には『ロロナのアトリエ』と書かれており、小さな丸い窓からは大きな釜が見える。
アトリエの煙突からは、モクモクと煙が上っており、日によって様々な色に変化していたり、香ばしいパイの匂いやむせ返るほどの火薬の匂い、時たま爆発音がしたりもするような、ごくごく普通のアトリエである。
そんなアトリエの主、ロロライナ・フリクセルは、錬金釜をかき混ぜる手を止め、額を拭った。
以前、汗が錬金釜に入った際に発生した爆発を彼女は生涯忘れることは無い。
というか、爆発に巻き込まれた師匠の説教・嫌がらせがトラウマになっているのだが、それは割愛しておこう。
今日作っているのは、酒場や屋台に納品するパイである。

住む世界は変われど、ロロナのパイに対する愛は変わらない。
世間のロロナに対する印象も『パイの人』であることは不動であった。
唯一無二の『錬金術士』という称号を持っていながら、ロロナ＝パイの図式には当人も大満足である。『あ～、あの錬金術士の人ね』と言われるよりもいい笑顔をしているのは、最早さすがであるとしか言えない。きっとロロナの大部分はパイで出来ているのだろう。

『うにパイ』『トードパイ』『シーフードパイ』『ミートパイ』『シュワパイ』『よっパイ』etc.
お酒のつまみにも、食事にもピッタリなロロナのパイは大人気商品だ。
よって発注数も多く、テーブルの上に複数の山が出来あがっている。勿論、正体はパイだ。

「これくらい作れば大丈夫だよね」
ロロナはいそいそとそれらをコンテナの中に入れ、ほんの少しのパイをカゴの中に入れた。カゴの分は友人の食料である。

井戸の傍にアトリエを構えたロロナの友人は、繁華街に店を構えているアクセル一の売れない魔法具店を経営していた。
名前はウィズ。今は引退しているが、昔は有名なアークウィザードだったのだそうだ。
魔法の才能はあるものの、商品を見る目の才能はからっきしな彼女は、いつも赤字に苦しめられてきた。そう、ロロナが常連になるまでは。

ロロナにとって変わったものを取り扱っている店は、錬金術の素材の宝庫。現在はアールズに店を構えているかつての友の面影をウィズに映した。
おっとりしたところとか。変わったものを取り扱っているところとか。店の経営が悪いところとか。一度死んでいるところとか。
ウィズの扱っている魔法具は様々な効果があって見ていて楽しいのだが、安心して使えるモノは残念ながら無い。
様々な特性を引き出すための素材としてロロナはウィズの店を贔屓にしていた。
値段が高いモノはお財布事情で購入できないので、いつか金持ちの収集家が来店することを祈るばかりである。

＊＊＊＊

「……はい、確かに受け取りました！」

一応ギルドの納品クエストに属するので、出来上がったパイはルナに渡した。

可愛らしい青い猫型のリュックから、ソレよりも大量のパイを取り出していく様に、偶然見てしまった冒険者の目が見開き、何度もリュックとパイの山に視線を移動させた。

「（分かるわ……何度見したくなるその気持ち、分かるわ）あら、このパイは新作ですか？」

その冒険者の視線に唯一気づいていたルナは、ロロナのリュックの性能の良さに物欲が生じた。冒険者たちや商人たちにとって、あのリュックはなんとしても欲しい。だが、デザインが……その、ファンシーなのだ。

強面の冒険者が持っていたら、窃盗を疑われてしまうくらいには。

ルナだって欲しい。だけど猫型のリュックは、なんかこう、抵抗感があるのだ。

ロロナのような、可愛らしい、小さな少女が背負うなら似合う。と思う。

違うデザインで作ることは出来ないのだろうか。

「はい。これはお酒を使ってないんですけど、食べたら酔っ払った気分になれるパイなんです！」

「酒場も併設しているので、お酒を飲めば良いのでは……？」

「まぁそうなんですけど、ほら、私みたいな人たちって、お酒を頼んだりすると止められちゃうじゃないですか」

言いたいことは分かった。

デリケートな話題になってしまうため、ルナは言いたいことを察しつつも、大人な対応をする。

「確かに、妊婦の方や子育て中の女性にはお酒は厳禁ですからね。さすがです、ロロナさん」

「ええ!?

……あ。そうなんですよ！お酒が好きでも飲めない人たちの為に！わたし、作ってみたんです!!」

アハハハーと乾いた笑い方をするロロナ。なんとか幼い少女の傷口を抉らずに済んだことにルナはホッとした。

「ところで、ロロナさん。そのリュックなのですが……」

「これですか？」

今までパイが入っていたリュックを持ち上げるロロナ。開け口からパイの匂いと何故か火薬の匂いがした。

「え、ええ。見た所、たくさんの量が入るようなんですが、それも錬金術で作られたのですか？」

ロロナのみが属する『錬金術士』というジョブ。彼女は錬金術というスキルを使ってギルドの納品クエストを、一時期全てこなしてきた。

今ではロロナのみを指名した納品クエストが発注されるまでの人気があるのだ。

依頼主のフワッとした抽象的な要求にピッタリと合うモノを造り上げる錬金術。ヘタな魔道具よりも魔道具らしいソレは、見た目だけでは性能はまったく分からない。

湖の水質調査をしたい。という依頼に、何故か飴を納品したこともある。

性能を聞いたら、『これをなめると水中で長時間活動できる』だとか。

依頼主も思ってたものと違うことに驚いてはいた。

しかし、他にはない実現不可能とされてきたモノだったので、依頼主はニッコリである。

「そうですよ～。この『秘密バッグ』は私のアトリエのコンテナと繋がっているんです！」

「（エ、ナニソレ原理分からない）それって複数納品することは出来ますか？」

ルナは深く考えるのを止めた。何故バッグとコンテナが繋がっているのかの原理を聞いたところで、頭が痛くなることは明白だからだ。

事実、ウィズとロロナの魔道具談義を耳にした冒険者が居た。数時間後、『ぐーるぐーる、ぐるぐるぐるぐる、ぐつぐつぐらぐら、ぐるっぐるっ♪』と意味の分からない擬音語しか喋れなくなっていた。とりあえず寝かせ、2時間後、目が覚めた彼は静かに涙を流した。

ちなみに、その冒険者は魔道具談義の記憶が根元からゴッソリと消えていた。

「できますよー　ただ、自宅にコンテナとか、倉庫とかがある人にしか納品できないんですよ。

あと、『秘密バッグ』とリンクしないとただバッグになるから直接納品した方が手間がかからないと思いますよ」

よくは分からないが、テレポートの登録と同じようなものなのだろう。と無理やり納得し、ルナはデザインについて聞いてみた。

「ちなみになんですが、デザインを変えることは出来ますか？

男性の方にも需要があると思いますので」

ロロナの表情が曇る。

「そうなんですよね……故郷の人にも言われたんです。可愛すぎて使いづらいって。

……でも、他の鞄を見ながら作っても、念じながら作っても、全部。全部」
沈んでいくロロナの表情を見て、結果を察せない者がいるだろうか。いや、居ない。
「全部、同じなんですね……」
ルナの結論に、ロロナは小さく頷いた。

ロロナとウワサ

青い空、香ばしい煙たい香り、クレーターだらけの草原に転がるヌルヌルな女が二人。

「どうしてこうなった……」

オレこと、佐藤和真は今後の冒険者生命に危機感を抱いていた。

朝、新しく仲間になっためぐみんを加えた三人で『ジャイアントトード』の討伐に向かった。

ぶっちゃけ、昨日アクアと2人で受注したクエストだったんだが、即行でアクアが捕食され、粘液まみれになった。救出した後は戦略的撤退という事で早々とアクセルに戻った。

ジャイアントトードは物理が効かない。

ロロナから貰っていた『クラフト』は物理の効果があるらしかったので使えなかったのだ。怖いからって『フラム』『フロスト』『メテオール』を持って行かなかったのがオレの昨日の反省。

新しいパーティーメンバーのめぐみんはアークウィザードだから要らないかもしれない。ただの勘だけど、『フラム』を何個か持って行くことにした。

この時の判断に感謝しか湧かない。

端的に言うと、フラムは全部使った。使い切った。ロロナに感謝だ。

ヌルヌルの一人、アクア。

こいつ知能足りなさすぎだろう。昨日物理で攻めて効果が無かったことが分かっているのに、また物理技で攻めやがった!!!!あっさり食われたアイツに特典は失敗した。と思っちゃっても仕方ないよな。うん。さっきからぎゃんぎゃんと泣いているけど、オレの方が泣きたい気持ちでいっぱいだ。学べよ、駄女神。

もう一人のヌルヌル、めぐみん。

究極の魔法が使えるアークウィザードだ。うん。ウソはついていなかった。

まさか、一発しか使えないとは想像してなかったけど。使った後、身動きが取れなくなるとも思ってなかったけど。ポケットなモンスターの『はかいこうせん』って技、使用後は1ターン行動不能になる技みたいな感じだな。1ターン以上行動不能なわけだけど。うん。

地面のクレーターの大きさや、肌で感じる熱気からでも分かる威力のでかさ。んでもって未だ耳鳴りが続くくらいデカい破壊音。

ボコッボコッとクレーターを中心に地面が盛り上がった。ひょっこりと頭を出したのは、ジャイアントトードだった。

オレこと佐藤和真は最弱職の冒険者である。

スキルはまだ持っていない。

引きこもりだったオレの基本的な幸運以外のスペックはとんでもなく低い。通信制限がかかったスマホ並に使えないと自負している。

さぁ現在、犬神家のようにジャイアントトードに捕食されている仲間が二人いる。自由に動けるのはオレ1人。

ついでに言うとジャイアントトードはまだ起き上る。

「詰みゲーじゃねぇかあぁぁあああぁぁぁぁああ!!!!!!」

ただ、幸運なことにいい爆弾は持っていた。

＊＊＊＊

ギルドから出たロロナはカゴを揺らしながら歩いていた。

時折すれ違う住民に挨拶をかわしつつ、友の店を目指す。
天気が良くって気持ちいいしパイも喜んでもらえた。ロロナの気分は上昇中である。思わずスキップしそうなくらいに。
「ママー、あのお姉ちゃんたち「しっ！指さしちゃいけません！」
思わず、顔がにやけてた自身を指摘されたのか！とロロナの足が止まる。声の主の女の子はロロナの前を歩いていた。進行方向的に違う事に安堵しつつ、『お姉ちゃんたち』が気になったロロナはそこに目を向けた。

「どんなプレイでも大丈夫ですから！先ほどのカエルを使ったヌルヌルプレイだって耐えてみせ「よーし分かった！めぐみん、これからよろしく頼むな！」
変態にジョブチェンジしていた知り合いだった。
思わず、籠を落としてしまった。
「「あ、ロロナ」」
変態（カズマ）とアクア（ヌルヌル）が声をかけた。自然と周囲の目も彼女に向いた。
ロロナはアクセルの街だけでなく、王都でも有名である。
彼女が納品するパイはアクセルの人々にも大人気だ。アイリス王女も御用達なんだとか信憑性のないウワサもあったりするが、ロロナのパイを一度でも口にしたら誰もが

そのウワサにも納得していた。
明るく穏やかな人柄も人気の1つで、冒険者としての腕もある。
そんな彼女は有名だった。名前と顔で『あのロロナ』と認知されるくらいには。
「え、あの子ってパイのロロナ？」
「あの変態と知り合いなの？ウソでしょロロナちゃん……」
「ロロナおねーちゃん、あのお兄ちゃんのともだ「しっ！ロロナちゃんがそんな子な訳ないでしょ！」
「そ、そうだよね、ロロナちゃんが……」
コソコソ聞こえる小声はロロナの耳に入る。なんだか恥ずかしくなって顔が赤くなってきた気がする。
そんな周囲の視線と声にいっぱいいっぱいになったロロナは
「うわーーーーーん!!」
泣きながら逃げた。

後日、ロロナはカズマに好意を抱いていたが、ヌルヌルプレイを好む性癖に加えロリコンであることにショックを受けた。

みたいな噂が流れてしまうことを彼女は知らない。

ロロナと錬金術

「ところでカズマ達はロロナと知り合いだったのですか？」

周りがガヤガヤと騒がしいギルドの酒場で、本日付けでパーティーメンバーになったロリっ娘がそう言った。

「ああ。この街に来たばかりの時に世話になったんだ」

主に金銭面とか。爆弾とか。

ロロライナ・フリクセル

アクセルの街で初めてパーティーを組んだ少女だ。

あどけない少女で、オレとアクアの初めてのクエストの依頼主。

正直護衛なんて必要のないくらいの強さを持った少女。報酬が前払いで、冒険者登録に使って無ければ、全額返金させてもらうくらい、オレ達は木偶の棒だった。

ギルドのルナさんによると、ロロナ1人が一カ月働かないだけでアクセルどころか王都の経済まで影響を与える可能性があるとかないとか。にわかには信じがたいけど、それが本当ならロロナに頼り過ぎでは無いだろうか。ロロナってどうみてもめぐみんと

同い年位じゃないか？過労にならない？
もし、ロロナの錬金術を教えてもらい、オレにも出来るようになればガッポリ稼げるのではないだろうか。
「出来るんならあの錬金術教えてもらいたいもんだぜ」
「冒険者ならスキルは覚えられるでしょうけど、上手くいくとも限りませんよ？」
「めぐみん、それってどういうこと？」
宴会芸をしていたアクアが手を止めてこっちの話に入ってきた。
めぐみんは眉を寄せ、小さく唸る。
「ここははじまりの街ですよ？カズマ以外の冒険者が居たとしてもおかしくはありません」
あっ（察し）
「？？どういうことよ」
本気で分からないのか、アクアは不思議そうな顔してめぐみんを見た。
「……錬金術はとても便利です。それを使えるのがロロナ『のみ』じゃなければ、もっとこの街は発展していたでしょう。お金だってたくさん稼げるに違いありません。
冒険者は全てのスキルを習得できます。カズマのように、『錬金術』を習得したいと考える冒険者がいないはずがありません。

ですが、何故ロロナのみしか錬金術士はいないのでしょうか」
ここまで言ってようやくアクアは気づいたようだ。
目を大きく見開き、大きな声で叫んだ。
「じゃあロロナは誰にも錬金術を教える気がないってこと!!??」

酒場が一瞬だけ静かになった。

＊＊＊＊＊＊
「くしゅんっ」
寒くもないのにくしゃみが出た。思わず鼻をさする。
持参するハズだったパイのカゴを落としてしまったことに気づいたのが、ウィズの店に入ってすぐ。コンテナに入っていたパイは全て納品したため、ウィズにあげる分が無くなってしまった。
砂糖水で飢えを凌ぐ友人は気にしなかったが、ロロナは違う。
友人と一緒にアトリエに戻り、出来たてをプレゼントしたかったのだ。
みるみる顔が青白くなるウィズを見たくは無かったのである。やはり友達には元気

で、笑顔で居てもらいたい。ポリシーだ。
「風邪？無理しなくていいんですよ」
「いや、寒くもないから違うんじゃないかなあ～」
もしかしたらパイの材料の小麦粉が原因かもしれない。
ロロナはそう結論付けると、錬金釜をくるっとかき混ぜた。
ち～ん♪
ベルのような音が鳴り、ロロナはかき混ぜ棒を釜から上げ、中からパイを取り出した。
「ウィズ、出来たよー！」
今回はお魚パイだ。
「ムグッ、ゴクッ　っあ～ロロナさん、おかげで助かりました～～」
「いいんだよ～」
友にはいつまでも元気でいてもらいたいものである。
まあ、それが不死王で飢えて死ぬことがなくても、関係ない。
ロロナは、パイで人を笑顔にすることが大好きなのだから。

「やっぱり見つからない？」
「ええ。ロロナさんが言ってた特徴にあう人は見つからなかったです」

ウィズと二人、並んで食器を片づけた。
最初は「ウィズはお客さんだし座っててー」とロロナが一人でやっていたのだが、食器が割れる音がしてからはウィズも参戦した。
「ロロナさんはその人が大切なんですね」
ほぼ毎日のように顔を合わせては、とある人物の行方を気にするロロナに、ほんの少しジェラシーを感じる。死んで亡霊になった後でも、生者に気に掛けられているのは、同じ亡霊としては羨ましい限りだ。
「うん。パメラも大切な友達だからね～。それに、パメラ位しかここに来れそうな人想像できないもの」
ロロナの人生の中で、数奇な思い出の1つ。
異世界に迷い込み、その世界のとある村を発展させる管理官に協力した時だ。
そこにパメラはいた。不思議なことを言っていて、当時は訳が分からなかった。
でも、複数の世界を渡ったロロナなら分かった。
パメラ・イービスは、ロロナの友は、複数の世界に存在する。その上、どの世界のパメラも記憶が繋がっているのだと。
ハチャメチャな推測だとは分かっているが、ほんの少しの可能性に掛けたいのだ。
錬金術の成功率が7割を切ったら挑戦するのは避けるのだが、それはそれ。これはこ

れである。

「ロロナさんってそんな遠いところから来たの？」

1人しか会いに来れる人を想像出来ないなんてなんて悲しいんだろう。

とウィズは同情しかけたが、ロロナの人柄を思い出し、直ぐにその考えを捨てた。

ありえない。こんな暖かい人の故郷の友が、1人だけなんてありえない。きっと事情があるに違いないのだ。例えば、国が違うとか。

世界の次元さえ違うことはさすがに想像出来ないウィズだった。

「そうだね、すっごーく遠いかな～

テレポートでも行けない所にあるよ」

そういったロロナの横顔が、笑顔なんだけどどこか寂しそうで、ウィズは止まった心臓が締め付けられそうな感覚がした。

＊＊＊＊＊＊

一人の男が地面に額を擦りつけ土下座していた。

声を震わせ、すまない。すまない。と繰り返し呟き、地面が乾く暇を与えない程涙を落とした。

黒かったその髪は所々抜け落ちており、一部白くなっている。逞しかった身体は、今では見る影もなく、草臥れていた。

男を知る者からしたら、あまりの変わりようで、はじめは知らない人だと思った。

でも、男はあの人しか知らないことを知っていた。

私と、お母さんと、あの人の3人だけの思い出を。

そこでその男の人とあの人が同一人物だと納得した私は、また、納得できない。信じられない事を男の人に告げられる。

ふらつく体を師匠に支えられ、幌馬車のアトリエに入る。ソファに体を預け、先ほど告げられた言葉が頭で響いた。

信じられなかった。

お母さんが、死んだなんて――

ロロナの師匠（アトリエｓｉｄｅ）

『おい、そいつから離れろ！』

２０年以上経った今でも覚えている。護衛任務の時のことだ。

完全にトドメを指せなかった私の責任だった。

彼女を怖い目に遭わせてしまった。

スニーシュツルムの攻撃から彼女を庇い、背に傷を負う。彼女はひたすら泣いていた。

ワープゲートを使い、アーランドに戻った最中も。

傷の治療を受けている時も、彼女の泣き声がずっと耳に木霊していた。

彼女と出会ったのは騎士団に所属して数年。理想と現実のギャップにもがき、騎士団から浮いていた頃だ。

アーランド発展に向けて、職人通りに居を構えるアトリエを閉鎖することが議会で決定した。

原因としてはアトリエの主人であるアストリッド・ゼクセスの職務怠慢だ。
何年も真面目働かなかった彼女は住民の評判も悪い。
唯一の錬金術士のアトリエを取り壊すのは忍びなく、救済措置としていくつかの課題をこなさなくてはならない。期限は3年。屈指の天才錬金術士とされていたアストリッドであれば、サボり癖が強かろうと余裕でこなせるだろう。と私はそう思っていた。

ロロライナ・フリクセルと名乗ったその少女は、王城で出会った。
アストリッドの代理だと名乗り、私の顔を見て怯えて泣き出した少女はアトリエ閉鎖に固まった。
自身の師匠が何かやらかしたのか!?と動揺する少女に、アイツに振り回さられるなんて可哀想だな。なんて思っていた。
まさか、まっったく何も教えていない弟子に全てを押し付けるなんて思ってもいなかったが……
ロロナくんが不憫でならない。
ロロナくんが友人と城門の外に出ようとしている所を見かけた。
聞けば、錬金術に使う材料の採取なのだとか。

『魔物からもいい素材が手に入るんですよー』と語っていた彼女に血の気が引いた。
警備員の様な仕事しかない騎士団より、国の課題の為に頑張る少女に手を貸した方が良い。
先輩に話を通し、ロロナくんの採集護衛をする許可を取った。

ロロナくんはひたすらに、愚直に課題に臨んでいた。
王国の課題以外にも、国が提示する依頼書をこなしてきた。
品質が良く、性能のいいそれを納品するロロナくんに対して、依頼人たちが増えるのは当然のことで、次第にアトリエの評判は高くなっていく。
錬金術士としても、冒険者としても実力を身に付け、明るい笑顔を絶やさない暖かな少女にいつから惹かれたのかは覚えていない。
その笑顔を、なによりも彼女を守りたい。
結果、身を庇っても泣かれてしまったのだが、彼女の無事な姿を見ただけで十分だ。

王国の課題をクリアーした後も私とロロナくんの交流は続いた。
互いに弟子をとり、彼らの成長を支え、
何故か８歳に若返った彼女を連れ、一国の姫と行動を共にし、

気づいた時にはロロナくんには娘が出来ていて、記憶が無くなるまで酒を飲んだ。

その後、ロロナくんの娘、エルメルリア・フリクセル――ルルアくんの護衛をすることになり、唯一存在したロロナくんにある蟠りも解消することが出来た。

ロロナくんになら背中を預けられるし、二人でならきっと大丈夫だとも思えた。

何があっても、助け合うことが出来る。

そう確信していた。

＊＊＊＊＊

ぐつぐつと煮えたぎる音がアストリッドの耳に入る。

森を思わせる匂いに混じった薬品の匂い。規則正しく、釜をかき混ぜる従者の姿が目に入る。大きく伸びをし、外してあったメガネを掛けた。

「グランドマスター、黒の香茶が出来ました。」

「ああ」

従者は、小柄な背丈・尖った耳・光の反射で色が変わる銀色の髪を持ったホムンクルスだ。

唯一の弟子であったロロナの為に造ったのだが、『師匠の監視・世話役をお願い！』と

命令されたらしく、今ではアストリッドの従者である。
ホムと名付けられたホムンクルスは、カップを受け取ったままじっと動かないアストリッドをじっと見る。
体温、呼吸に乱れは無く、至って健康体なのだが、どこか具合が悪いのだろうか。
グランドマスターに限って精神の病など発症はしないと思うのだが、優秀すぎる錬金術士から産まれたホムは、肉体的な異常はすぐに分かる。言葉が分からなくてもフィーリングで気持ちも分かったりするのだが、精神的な症例には明るくない。
「いかがなさいました？」
「……変なんだ」
アストリッドは天才である。人に弱みや相談などしない。気分屋だ。
自身より遥か以前を知るユウレイには敬意を。
自身が造り挙げた人造人間（ホムンクルス）にはありのままを。
自身の弟子は弄る。からかう。
腰のベルトに留めている試験管を軽く撫でる。
「ロロナの反応が２つある」

＊＊＊＊

ステルケンブルク・クラナッハはアーキュリスにある広場の噴水の前でうずくまっていた。

数年かかる調査であったのだが、道中、事故でロロナが死に、同行していたミミ・ウリエ・フォン・シュヴァルツラングが中断するよう進言したのだ。

「今のステルクさんは調査の邪魔です」

涙を堪える表情で怒られてしまった。

ステルクは情けなかった。

鉛のように重く、自身の体のハズなのに思うように動かせない身体が。

「ステルクなのか？大分変ったな。イメチェンが過ぎるぞ」

錆びついたネジのように、鈍い動きでステルクは音のする方向を見た。

逆光になっていて顔の詳細は判断できなかったが、二人の人影だった。

1人は長い髪の女。堂々たる態度で立つ女の知り合いは、ステルクの中には一人しかいない。

「アストリッドか？」

「変わったな。ステルケンブルク。お前に少々質問がある。」

「お前が私に質問なんて珍しいじゃないか」

覇気のない幽鬼のような姿にアストリッドはその柳眉をしかめた。
普段なら。普段のステルクなら突っかかるはずなのだ。
異常なまでのステルクの変貌ぶりにアストリッドは１つの推測を立てた。
「なんだ。ロロナにふられたのか」
刹那、肩を震わせ頭を抱えるステルクに、『まさか』と思う。
ロロナとステルクが互いを想い合っているのは一目瞭然である。
のに関わらず、２０年経った今でも一緒になっていないのは『蟠り』と『ステルクのヘタレ』が原因であることは誰もが知るところだ。ロロナ？天然にそんなこと望んではいけない。好いている男に突然『私、娘が出来ました！』なんて言う女は恋愛の駆け引き以前の問題である。ちなみにアストリッドはこの話を聞いた時、全力でステルクを弄繰り回した。爆笑しながら。
「まさか朴念仁の堅物な貴様がちゃんと告白することが出来るとは……」
感慨深いものだ。
うんうん満足げに頷くアストリッドに従者は白い目を向けた。
「グランドマスター、本題からずれています」
「まあいいだろう、ホム。ステルケンブルクがからかいがいのない反応を取るのが悪い。」

傍若無人である。
アストリッドはしゃがみ、ステルクと目線を合わせた。虚ろな目に全力で舌打ちしつつ、要件を告げた。
「ロロナはどこだ」
アストリッドとステルクは幼馴染である。
からかい、からかわれるような関係が４０年以上続く。長い長い関係である。
感情の表現がヘタなステルクは子供のころ、よくからかわれては泣いていた。
目つきの悪い鳶色の瞳に、涙を溜めて静かに泣く子供だった。
大人になるにつれ泣くこともなくなり、目つきの悪さが浮き彫りになったのだが、そこは割愛しておく。
「久しぶりだな。貴様がそうやって泣くのを見るのは」
声を出さず、静かに涙を流すステルクにアストリッドは事を把握した。
ロロナは、彼女の愛弟子は逝去したのだ。
しかも、ステルクが近くにいる時に。
「なるほど。おおよそは把握出来た。パメラはまだアールズにいるか？」
無言で頷くステルク。次の行き先が決まったアストリッドは、トラベルゲートをホムから受け取る。

「ホム。すぐ戻る」
「承知しました。グランドマスター」
光を纏って消えていったグランドマスターを見送ったホムは、未だ項垂れ涙を流すステルクにタオルを差し出した。
「大丈夫ですよステルクさん。マスターは見つかります」
「そうじゃないんだ……ロロナくんは、死んでしまったんだ……」
「ええ。ここのマスターを逝去しましたが、まだマスターの反応があります」
ふと脳裏に1人の為に平行世界をも救った少女を浮かべた。
過去を変えるのか？
出来るのだろうか。死者を蘇生することは。出来るのなら、会いたい。また、ロロナくんに会いたい。会って、伝えたいことがあるんだ。伝えなきゃ後悔する事があるのだ。
「どういう、ことだ？」
「グランドマスターから『確証が持て次第話してやる』……だそうです。確認はすぐ終えられるそうなので「どういうことなんだ!!?」
睨みつけるステルクに、先ほどまでの弱弱しい印象はどこにもない。ホムは僅かに頬が上った。

「グランドマスターがマスターに発信器を付けていたらしく、複数の反応があったのです」

ただ、濁った川底に沈む光のように鈍い反応なのだそうだけど、生気を取り戻し始めた男に対しそれは無粋であると判断したホムは、それを押し留めたのだった。

「で、では!すぐにルルアくんに!!」

「まだです!グランドマスターが戻られ次第でないといけません」

「だが!」

あんまりだ。逝去した母親が生きているかもしれないというのに。

「確証が持てないことを、ルルアお嬢様に軽はずみに伝えることは致しかねます」

「では何故君は私にそれを?」

聞かれると思っていたのだろう。ホムは幾分か穏やかそうな顔をしていた。

「グランドマスターからの命令です。ルルアお嬢様は平行世界の過去すら変えられる実力の持ち主であるので知らぬ間に動かれて取り返しのつかない事態にならぬように。とのことですので」

ステルクは押し黙った。

ルルアの行動力は十分すぎるほどに知っているからだ。

ルルアに対し罪悪感が湧かないわけがないが、それであの天才が懸念する事態になっ

た場合、解決できそうな者が一人もいない方が問題である。
　ルルアの行動力の高さを知っているが、同時にアストリッドの読みの深さや天才さを知っているステルクとしては、アストリッドが戻るまで待っていた方がマシだと思った。

ロロナの友達

ロロナの朝は早い。
野鳥の囀る声が聞こえ始めると同時に身支度を整える。
錬金釜に火を点け、薬品と水を混ぜる。精密さが重要であるため、幾度となくやってきても必ず計量カップと天秤を使用する。
自身の師匠は計ることなく、かと言って慎重に投入する訳でもなくこの作業を行っているのを見たことがあるのだが、異臭や爆発が起こったりなどはしなかった。ちなみにロロナも挑戦してみた結果、爆発・異臭が発生。通常の錬金術の失敗とは比べようもない程の被害が出て、通報を受けて見回りに来たステルクに折檻を喰らったほどだった。
「(ステルクさん……元気してるかなぁ)」
家庭菜園の作物たちにクリエイト・ウォーターで水を撒きながら、ロロナの頭を占めたのはステルクの事だった。
――二人で一緒なら、どんなことだって乗り越えられる。
そんな事を言っていたのに、今のロロナは旅の途中で死に、異世界で暮らしている。

せめて元気に暮らしてたらいいなぁ。
と願いつつも、逆の立場だったら……と考えるとロロナは深いため息をついた。
水を撒き終え、以前のアトリエのインテリアであった魅惑の女神像に向け、お祈りを奉げる。
本来、魅惑の女神像の効果は『良い噂が広がる』ことだ。
だが、この世界で新しく錬金術で作った魅惑の女神像は何故か顔がエリスに変換されており、アイテムを『鑑定』スキルで確認したら名前が『幸運の女神像』に変化していた。
この幸運の女神像の効果はと言うと、その名の通り『幸運になる』だ。
だからロロナはそれに向け祈る。アーランドに遺してきた娘、弟子、友人、ステルクに。
それがロロライナ・フリクセルの日課だった。
祈ること数十分。
小腹が空いてきたロロナはコンテナからミルクパイとブランクシチュー、黒の香茶を取りだし、食卓に並べる。
ミルクパイとブランクシチューで前日の疲れを癒し、黒の香茶で眠気を飛ばす。
眠気が飛んで、完食したら食器を手早く片付ける。幼い頃はしょっちゅう皿を割って

いたりモタモタと洗っていたが、子育てや一人暮らしが長かったおかげか大分こなれてきた。

食器を食器棚に戻し、作業机から紙束を確認する。

紙束は受け付けているクエストの納品書だ。品物・個数・期限を確認し、効率の良い順序を決める。やっぱり今日もパイが多い。思わずロロナは笑みを深めた。

パイ（種類問わず）にインゴット、フラムとメンタルウォーター、ヒーリングサルヴが今回の依頼である。

「メンタルウォーター（回復）とヒーリングサルヴ（薬）は久しぶりだなぁ～」

メンタルウォーターは読んで字のごとくＭＰの回復アイテムだ。ヒーリングサルヴは傷口を癒す薬である。アクセルははじまりの街ではあるものの、中堅冒険者も多く駐在している街だ。プリーストだっている為、体力や傷口を回復するような薬はあんまり需要は無い。メンタルウォーターの需要は高い方なのだが、使うほど苦戦するクエストに挑戦する者が居なかったり、『我が魔力が全快するほどの効果でないと意味がありません！』と言ったウィザードが居たり。『マナタイトの方が割れる心配ないから』ｅｔｃ．

であるため、冒険者相手の回復薬の需要は殆どないのだ。

需要があるとしたら冒険者ではなく、一般の住民だろう。魔法が使えない者がほとん

どであるため、切り傷に効くヒーリングサルヴは常備薬として必要であるし、メンタルウォーターは頭がスッキリする効果もある為、頭痛薬として利用されているのだ。

どちらもパイに比べれば利用頻度は少ない為、久々に感じたのだった。

鼻歌混じりに錬成し、出来上がったものは『秘密のバック』に詰め込む。ここまでで所要時間はおおよそ6時間。日も高く上がり、外は行き交う冒険者たちで賑わっていた。

コンテナ内の素材の残数を確かめておく。じゃないとパイが作れなくなってしまう由々しき事態が発生してしまう。小麦粉、水は切らしてはいけないのだ。常にストックが５０個なければ酒場用・自分用・ウィズ用のパイを賄うことは出来ないのである。

納品した後、採取に行く予定の為、杖を用意しておく。今回の採集の相方はウィズだ。

パイを御馳走している時に約束を取り付けていたのだ。

ウィズとは納品後に迎えに行くと告げている為、ロロナは足早に酒場に向かうことにした。

＊＊＊＊＊＊

ウィズの魔法具店には変わった魔法具が取り扱っている他、ロロナが錬成する爆弾や薬を卸売している。

魔法具よりも爆弾の売れ行きが良いのはお察しなのだが、魔法具を買い取ってくれる相手もいる。ロロナだ。

錬金術は素材の特性を引き出す術だ。ウィズが売る商品は様々な特性を持っている。例えば爆発する。とか。しめつける。とか。覗き込む。とか。

そういった特性を生み出すため、ロロナはそれらの商品を購入している。

『追爆』効果のある爆弾や、『未来視』する水晶玉が生み出されることになったのだ。

「ウィズー！来たよー！」

納品によって懐が潤ったロロナの表情は一際輝いていた。まるで１００万コールに近づいてきたときのように。

対象として、ウィズの表情は陰っていた。推していた商品が軒並み売れ残った時のように。

「あらー。待ってましたよ～」

幸薄い顔で魂が抜けたような青白い顔で、ウィズはロロナを出迎えた。

台に上半身を預けていて、とてもじゃないが客を出迎える体勢ではないのだが、本日は午後からの営業は休みである。午前中も来店客はいなかったのだが、ウィズの記憶ではそんな事実は無いのである。無いったら無い。

「ご飯食べてから採集に行く？ウィズも用事があるんでしょ？」

秘密バッグを来客用のテーブル――熟考するお客様の為に備え付けられた。実績は、ない。――に降ろし、ウィズ用のパイを取り出した。

「相変わらず美味しそうですね！　ええ、真夜中まで気が抜けないのでぜひ！」

輝くウィズの笑顔を見て、ロロナは笑みを深めるのだった。

＊＊＊

ロロナがウィズと出会ったのは、納品クエストで名が売れ始めたばかりのころだ。

『面白いモノを売っている魔導具店』があるとルナから聞いたロロナが、ウィズの店に訪れてから、妙に波長が合った2人はすぐさま仲良くなった。

ウィズはリッチ―と呼ばれるアンテッドである。

普段はリッチ―であることを隠していたのだが、ロロナが差し入れたパイを目の前で食べたことでアンテッドという事が判明。死者（アンデッド）と分かっても態度を1ｍｍも変えなかったロロナなら、ということでアンテッドの王・リッチ―であることを告白したのだ。

今までずっとひた隠しにしてきたので、ひとりに秘密を告げるだけで胸のしこりが取れたウィズなのだが、その当時のロロナときたら、「ふーん」だけで終わったのだ。

これにはウィズもビックリ。距離を置かれるのもそれはそれは悲しいことだが、仕方ないことだ。と納得は出来る。でも、こんな反応はまったく予想していなかった。

思わず、

「怖く無いんですか？」

と聞いたほどだ。たとえ自身が逆の立場だった場合、騙された。という気分になっても可笑しくないのだ。だって、リッチーなのだから。魔族側の存在なのだから。

自身のマイナス思考中に凹んでいるウィズに、ロロナは小さく唸るだけだった。

「そりゃあお化けは怖いけど……リッチーってなんなのかよく分からないし」

アーランドには、ゾンビはいない!!!

アンテッド系というか、ゴースト系……しかも見た目は可愛らしい感じのモンスターしかいないのだ!!そんな世界で育ったロロナは、ゾンビは知らないし、リッチーという存在もどういうものなのか知る由もない。

「幽霊の友達も故郷にいるし、その子……パメラって言うんだけど、パメラって全然怖くないんだよ。たまーに驚かせることもあるけど……」

笑顔を咲かせるロロナを見て、ウィズはそのパメラが羨ましかった。

「だから、死者？だからってウィズを怖がることはないよ？だって友達じゃない！っというか、具合大丈夫？運気が上って欲しかったからパイに『女神の加護』の特性が入ってたんだけど……きゃあ！」

リッチーも浄化しかける

天国のような味、女神パイがギルドに納品されることは無かった。

閑話休題（何故そんな事を言うのかというと）

「……ごめんなさい」

二度目の天国味を体験したウィズから香ばしい臭いが漂っていた。

透明になりかけたウィズの目の前には、ロロナが正座している。

初歩的なミスなのだが、渡し間違えてしまったのだ。ロロナとウィズのパイを。

錬成するパイは一度で複数個出来上がる。お蔵入りした女神パイも、以前ウィズに渡した分以外にもあるのだ。久々に食べようと思って皿に乗せたは良いものの、ウィズ用のパイと見た目が似ていたことがいけなかった。というかアンテッドの前で女神パイを食べようとしたことがいけなかった。

ちなみにウィズ用のパイは『トードパイ』。夜の活動へ向けて活力を付けて欲しいから。が理由である。ウィズも大好きな一品だ。

「だ、大丈夫。一口だけだったから！そのあとトードパイも頂いたし、大丈夫よロロナ！わざとじゃないって分かってるから！だからはやく立ち上がって!!」

採集は延期！（本調子まで自宅待機）

夜である。
ウィズの用事の時間でもある。
「毎日してるの？」
「ええ。この間知ったのだけど、町外れの墓地に成仏出来ない迷える魂がたくさんいるみたいなの。町に駐在しているアークプリーストに勇気を出して相談したのだけれど……その、私お金あんまり持ってないから……」
悲しそうに眼を伏せるウィズにロロナはそっと背中を摩った。現在、墓地のど真ん中である。
魔方陣を描きながら、ウィズはロロナに依頼した。
「稀にゾンビも出てきちゃうから、ロロナにはそれを倒してほしいの」
ゾンビの姿を学習したロロナの顔から血の気が引いた。

＊＊＊

「ロロナ！新しいゾンビ、出てきますよ！」
「ふえ～ん！」
ゾンビが出現してはメイスで殴り、距離が遠ければクラフトを投げる。
浄化作業が始まって早一時間。ロロナが討伐したゾンビは5体に及んだ。

しばらくの夢はこの思い出に違いない。ロロナは泣きながらメイスを振るう。
魔法陣から溢れる光は、まだ魂を浄化し続けている。途切れることがないそれに、1日の死者の多さに驚きを隠せない。ゾンビも眠り過ぎでは無いだろうか。
「ウィズ～～まだぁ？」
「あともうちょっとです！何か、大きな魂が引っ掛かってるんです！」
そして、一際大きく輝いた所で
「リッチ―がこんな所にノコノコ出てくるとは不届きな！成敗してくれるっ!!」
乱入者（アクア）が現れた。
アクアは物凄い速さで魔法陣まで走ると、砂の絵を消すように足で魔法陣をかき消した。
光が弱くなる。消えかかった大きな光に、ロロナは咄嗟に引っ張り上げようと手を伸ばした。手先がヒンヤリして背筋が走るが、構わずに引っ張り上げようと更に力を込める。
視界の端ではアクアがウィズに突っかかっていた。二人の争いを止めたい気持ちもあるのだが、今はこの魂だ。なんだか手を離したら、そのまま消えてしまいそうな気がする。

「リッチーの癖に浄化なんて生意気よ！そんな善行はアークプリーストの私がやるから、あんたは引っ込んで見てなさい！

こんなチンタラチンタラやってないで、私がこの墓地ごと浄化してあげるわ！」

「ええっ!?ちょ、待ってええ！」

切羽詰まったウィズの悲鳴が聞こえる。助けに行きたいのは山々なのだが、ロロナはロロナで手が離せそうにない。

『ターンアンデッド!!』

刹那、白い光が墓地全体を覆う。仕留め損ねているゾンビや、ロロナが掴んでいる魂以外の魂たちが浄化されていった。つっかえが取れたのか、引っ張り上げることが出来たのだが、その魂は浄化されることなくその場に留まった。

ちゃんと抜け出たことに安心し、ロロナはウィズの援護に回ろうとした。

「ウィズ!?」

「え、ロロナァ!?」

カズマの驚く声が聞こえた。

消えかけたウィズに気を取られているロロナは、自身を呼ぶ声に目を向けることなく、ウィズに駆け寄った。

「ちょ、あぁぁ！　身体が消えちゃう！成仏しちゃうううう!!

ロロナぁ、助けてぇぇぇ!!」
「あははは!愚かなるリッチーよ!私の力で欠片も残さず消滅するが「アクアちゃんやめてぇぇぇぇぇ!!」
ウィズの前で庇い立つロロナだが、生者に意味のないターンアンデッドはロロナを通り越してなおもウィズを浄化しつつある。
ウィズとロロナの絹を割くような悲鳴と懇願。アクアの愉快そうな笑い声。
この場面だけ見れば、悪者は明らかにアクアであった。
とりあえず可哀想なのでカズマは背後からアクアの頭をはたいた。
「止めてやれ」
「っ!?ちょっと!何すんのよ!」
予期せぬ痛み故か、白い光は消えた。ウィズの身体が消えるのも収まる。あの魂はその場に留まったままだ。
「ウィズ!大丈夫??」
「ロロナぁ」
涙目でロロナに縋るウィズと、それを受け止めるロロナの間でカズマの視界に百合の花が咲き乱れた気がするが、瞬きしたら消えた。
「ちょっとカズマさん!?浄化を止めるなんてなんてことすんのよ!」

と抗議するアクアをさらっと無視して、カズマはなおも震えるウィズに声を掛けた。
「お、おい、大丈夫か？リッチ―……であってるのか？」
「え、ええ。お陰様でなんとか……助けていただき、ありがとうございました。えっと、仰る通り、リッチ―です。名前はウィズと申します」
立ちくらみしたようにふらふらとしたウィズは、ロロナにしがみつきながらも丁寧にお辞儀した。

＊＊＊＊＊＊

立ち話もなんだ、という事で、オレ達はレジャーシートに腰を掛けた。
隙あらばウィズを浄化しようとするアクアは、ロロナの道具――生きてるナワで縛られている。ダクネスが羨ましそうにアクアを見つめていたが、話が拗れそうだから無視だ。
ネコ型の鞄から、人数分のパイを取り出すロロナ。ゲームでよく見るアイテムボックスのような奴だろうか。欲しいな。あとで聞いてみよう。
こちら側からは、『クリエイト・アース』で作ったコップに『クリエイト・ウォーター』で水を注ぎ、『ティンダー』で温めた後、粉末のコーヒーを注いだモノを提供した。
「あら、初級魔法をこんな風に使いこなす人なんて初めて見ました」

ウィズがキラキラした目で褒めてくれた。美人に褒められるとなんだかむず痒い。
「えっと、ロロナたちって、なんでこんな夜中でこんなことを？
ウィズが魂を天に還すとか言ってたけど、そういうのってコイツみたいなプリーストの仕事じゃないのか？」
親指でアクアを指示しながら二人に問うた。アクアが芋虫のように近づき、オレにかみつく。
「ちょっとカズマ！そんなのと喋ってたらあんたまでアンデッドになっちゃうわよ！
ちょっとソイツにターンアンデッドをかけさせなさいよ！
ロロナ！早くこの縄を解きなさいよ！ターンアンデッド出来ないじゃない!!」
どうやらあのナワは結んだものしかほどけないようだ。アクアが身動きしているが、隙間が全く生まれる気配がない。形状記憶型合金のように、ピッタリとアクアの体にひっついている。
なんつーか、縛り方が違うとエロそうな感じがする。性格アレだけど、見た目いいもんな。コイツ。
「アクアちゃんごめんね。ウィズは大事な友達なの。アンデッドだからリッチーだからっていう理由だけで浄化させるなら解放する訳にはいかないよ」
舌ったらずながらも、ロロナは比較的鋭い目でアクアを見つめた。

ぐぬっと呻き声を漏らすアクア。

「えっと、悪いなウィズ。さ、続きを話してくれ」

「え、えっと、私は仰る通りリッチ―です。アンデッドの王とか呼ばれるくらいなので、私には迷える魂たちの話が……ふぇ？」

カワイイ。

ウィズが後ろを振り向き、次いでロロナを見た。また後ろを向き、「そうなんですか!?」と声を上げる。いるの？そこに迷える魂いるの!??

「ろっ、ロロナ！パメラさんって、確かロロナのお友達でしたよね!?」

「そうだよ？……え。まさか!!!」

色めきたったロロナが、後ろを振り向いた。

「パメラ、そこにいるの!?」

「ええ！ロロナが引っ張っていたあの大きな魂、パメラさんみたいです！

……え？ふんふん……そうなんですか!?え～ロロナ喜びますよ！」

「なになに？ウィズ！パメラ、なんて言ってるの!??」

きゃいきゃいはしゃぎ始めた二人を見てると、なんだか全くもって悪者って感じがしない。そして、なんだか癒される。ほら、うちのパーティーに無い感じだし。こういうの。

「カズマ？今何か失礼なことを考えませんでしたか？」
「イイエ、ナニモ」
臨戦態勢の紅魔少女が背中に杖を突きつけた。
そういうところが特にそうなん……いえ、何でもないデス。
「えっと、場所特定したわよ～ですって。あとロロナのバッグに憑依するわね～だって」
「うわ～やった！明日、人形用意するからね！パメラ！」
場所特定って不穏な響きだな。まぁ、知り合いだしいいのか？
「良かったわね、ロロナ」
「うん！」
涙を溜めたロロナを慈愛の女神のように撫でるウィズ。またしてもオレの視界に百合の花が。しかもなんだか光り輝いて見える。これが尊いという感覚なのだろうか。
というか話に戻していいだろうか。
未だ泣くロロナを胸に抱き、ウィズはロロナをあやす。
少し変形したそのたわわな胸が目を釘付けにしてやまない。っーかロロナ息できるの？羨ましいし変わって欲しいけどそのまま見てたい自分がいるっていうかなんていうか。

背中に杖が当たった。胸から視界を外す。

「ごめん、なんか申し訳ないけど、話の続きをお願いしていいか？」

＊＊＊＊＊＊

話を要約すると、ウィズはとても良い人だった。

というかこっちの方が女神っぽい。誰と比較してるのかは言わずとも、だ。

金が無い奴らの浄化は後回し、見て見ぬふりするこの街のプリーストに代わって、日夜浄化に勤しんでいたのだという。

その時、オレら一行が一人の水色プリーストに視線を向けたのは日々の生活からして当然っちゃ当然だった。

「では、何故ゾンビまで出てくるんですか？私達はゾンビメーカーの討伐という事でこちらの墓地に来たのですが」

めぐみんが聞いた。

「あ…そうでしたか。えっと、呼んでいる訳じゃないんです。

私の魔力に反応して、勝手に起きてきちゃうんです。今日は浄化中に生まれるゾンビをロロナに討伐して貰ってたんですけど、それ以外の日は……なるべく討伐していたん

ですけど」
申し訳なさそうに目を下に向けたウィズ。
「私としてはここの魂が迷わず還ってくれればここに来る必要もないんですが……」
と続けた。
そういう理由なら、仕方ないよな。
転がってるアクアに視線が集まる。

「分かったわよ！私がそのリッチ―の代わりに浄化すればいいんでしょー!!」
やけくそのような返答をするアクアに、ロロナが思わず抱きついた。
「ありがとー！アクアちゃん！」
「その前にこのナワ外しなさいよー!!」
アクアの悲鳴に似た叫び声が、墓場に木霊した。

ロロナとパメラ

モンスターのドロップアイテムや爆弾類が陳列している店の奥。来客が居なければ、店主のティータイムに使用されているこじんまりとした休憩室。そこには二人の美女が居た。

1人はアストリッド。もう1人は紫色のウェーブがかった髪を持ったパメラだ。

パメラは机に伏せており、紫色の髪が広がっていた。アストリッドはそれをただじっと眺めている。

パメラの上半身がゆっくりと上がった。目が微睡んでいるが、表情は晴れやかで、頬はバラ色に染まっていた。

「特定できたわよ〜〜」

特徴的な間延びした声。アストリッドはクックと愉快そうに喉を鳴らす。

「やはりロロナは退屈しないな！パメラ、そこはどんなところだ？」

「え〜〜〜っとね、ちょっと待っててねぇ〜〜」

再度パメラは机に伏せる。

ロロナに施した発信器。受信機にはロロナが埋葬されている墓地に反応が1つ、朧気でダブったように見える反応が1つある。

不確かな反応はパメラからの証言の通り、異世界にあるのだろう。異世界。ああ、なんて魅惑的な響きだろう。そこにはどんな面白おかしいことがあるのだろうか。どんな生き物がいるのだろうか。アーランドを長い間旅してきたアストリッドは、未知の領域に心躍らせた。

次元を渡る事など、《時》の概念が無いに等しいアストリッドにとっては容易いことだ。今のアストリッドに必要なのはその世界の情報のみ。それさえそろえばすぐにでも次元旅行に繰り出す所存である。

勿論ステルクにも伝えるところだ。幼馴染として、ロロナの師として二人の恋路を見守り、あわよくば弄り倒したいがため。ちなみに後者が9割であることは言わずもながである。

＊＊＊＊＊＊

パメラ・イービスは幽霊である。

驚かせることが好きで、ちょくちょくロロナを驚かせていた。

今回もそうだ。『秘密バッグ』に憑依したパメラは、一足先にロロナのアトリエの『コ

ンテナ』に先回りした。バッグとコンテナが繋がっているから出来た芸当である。

先回りし、ロロナがコンテナの前に立った時にビックリ箱のように驚かせる予定だ。

毎回探索から帰ったらコンテナをチェックする習慣を、元同居人であるパメラはバッチリ把握していた。

元、と言っても同居期間はほんの数週間、数か月くらいだったと思う。パメラの店をアストリッドが作ってくれた後、パメラは店で生活することになったのでロロナとの同居は終了した。

さて、とパメラはアトリエ内を見渡した。短い間だったが、その当時と変わらないような内装のアトリエだ。

もしやロロナったら同じように家を改装したのかもしれない。これがホームシックというやつなのだろう。アストリッドに伝えたらどんな曲解をしてロロナを弄繰り回すのだろうか。そんな二人の絡みを想像し、クスリと笑みをこぼす。

ロロナの反応は驚かせることが本分の幽霊にとって、良い反応をしてくれるのだ。

幽霊冥利に尽きる友人を持って幸せだなあ。などと思いながら部屋を見渡すと、作業机に見慣れない少女の像があった。聖なる気が感じられ、見てるだけで背筋が凍る気がした。なんだろう、その像から《アンデッドを消す》という凄みを感じる。それを見ているだけで魂だけでしかないパメラの精神はゴリゴリに削られていくのだ。

『え～～こんなのがあるとロロナと楽しく住めないじゃない！』
人形の肉体があればまだマシなのかもしれない。
どかそうにもポルターガイストの原理で触ろうとすると、体が焼かれるように痛いのだ。
パメラにとって幸運の女神像は呪われた少女の像であった。
早いところロロナに住む場所を斡旋してもらわなきゃいけない。何だか懐かしい気持ちになるのだが、原因が原因なだけに、素直に喜ぶことが出来なかった。

ロロナの鼻歌がドアの外から聞こえた。
現在は深夜帯であるので、通りは静かだ。静けさも相まって、その声はやけに響いた。
パメラは計画通りにコンテナに潜む。玄関をじっと見つめた。
ドアが開き、嬉しそうにスキップするロロナ。計算通りにコンテナに近づき、腰を降ろす。――今だッ

ロロナは不貞腐れていた。これ見よがしに頬はリスのように膨らんでいる。

パメラのドッキリは大成功だった。ロロナは非常に良いリアクションをしてくれた。しすぎてくれたのだ。近所からクレームが入るレベルの大絶叫（リアクション）を。

諸悪の根源のパメラは終始ご満悦な表情でロロナの頬をつつく。アストリッドへのいい土産話（ネタ）がまた一つ増えた。

『も～ロロナったらそんなに不貞腐れなくってもいいじゃな～～い』

幽霊スタイルのパメラは貴族の令嬢が着るようなドレスを身に纏っている。胸元が開いて、白のフリルがふんだんにあしらわれた紫のドレスだ。頭には同色のヘッドドレスである。その状態で天井から吊り下がったり、水中で泳いでいるように寝転んで漂ったりとフワフワと浮かんでいた。

「だってぇ、ほんとびっくりしたんだよ!?お隣さんにも怒られちゃうし」

ペコペコとお隣さんに謝ったのち、お隣さんから『早く寝ないと大きくなれないよ』と2か所を見つめられた事実はないのである。無いったらない。けしてそれで不貞腐れているわけではないのだ。そんな事実は無いのだから（しつこい）。

『ねえロロナ、ちょっと聞きたいことがあるのだけど』

「どうしたの？」

ロロナはコンテナを探る手を止め、パメラを見た。

『あなたはいままで何をしてたのかしら』

「んっと～……」

ロロナは顎に指を当て、語った。

死後の世界でエリスと名乗る女神から《異世界転生》を勧められた事。

その世界には魔王が存在して、倒してほしい事。

その為に、転生者には何か1つ特典がある事。

それを、《アーランドの自分のアトリエ》にした事。

そして、このアクセルという街で錬金術士としてクエストをこなしているという事。

「――というわけで、冒険者や錬金術士として働いてるんだ～」

冒険者カードをパメラに見せた。記号のような文字が並んでいて、全く読めない。パメラが唯一分かったのはロロナの似顔絵位だ。

「ねえパメラ、ルルアちゃんの様子教えてくれない？」

ロロナの瞳が不安そうに揺れ動く。ロロナの養子であるエルメルリア・フリクセル――ルルアも錬金術士である。柔軟な発想力で若くして規格外な錬金術アイテムを作り出した鬼才である。

ずば抜けた行動力を持ったルルアはどうしているのだろうか。もしや雪山にヴィントシュトーネ狩りに行ってるのかもしれない。

友を助けるために、錬金術を短期間でマスターし、その後も助けられなかった平行世

界の友を救うために平行世界に赴き、見事救出したロロナの自慢の娘である。
平行世界じゃキリが無いのでは?といった疑問も出たが、『時の楔』と言う『事象』を『固定』させるアイテムを一から創りだし、どの世界でも『救った』という事実を残している。
過去に行く手段を身に付けたら、ルルアはきっとロロナを救出しようとするだろう。
必要なアイテムを手に入れるために、平気で危険な所に向かうだろう。ルルアは友達に恵まれているから、きっと彼等もルルアの手助けをしてくれる。1人で行動するよりは安心だが、ロロナはルルアを助ける事や様子を見ることも出来ない。それが酷く不安で、胸が苦しく、怖いのだ。
過去に飛ぶためには時空を歪めるための素材が必要である。
ロロナがパッと脳裏に浮かんだ場所は、外見で判断してはいけない程強力なモンスターが沢山いるところだ。どこか見覚えのある服を着て、爆弾を投げつけるリスなんて強敵だ。何度ネクタル(蘇生薬)を使ったことだろうか。
そんな場所に娘や、友人たちが行くと想像するだけで全身が震えてしまう。

「もしかしてマキナ領域に行ってたりしないよねぇ!!」
「ん〜〜あの子ってそこ知ってたかしらぁ?」

「えっ？……んー私は教えてないけど、トトリちゃんとかメルルちゃんは？」
あんな危険な場所、必要に駆られない限り教えることは無い。
けれど、必要なアイテムがあるかもしれない。と誰かが教えたら？一つの疑問が生まれると、不安はどうしても消えない。小さな楔となって残り、徐々に楔は大きくなるのだ。
「トトリは評議会。メルルはロロナの代理で東の大陸に行ってるってアストリッドが言ってたわよ～～」
仮にもアーランドの錬金術師として名を馳せたロロナである。そんな彼女が調査中の事故で亡くなったとあっては、各方面に影響が出てしまうのは仕方のない事であった。
トトリは評議会の仕事をこなしつつ、メルルが請け負っていたクエストも同時進行でこなしていたのである。
本来はロロナの代理はトトリであったのだが、トトリの代わりに評議会の仕事をこなせる者がおらず、東の大陸はトトリの代理にメルルが派遣された。トトリが東の大陸に来ると待ち望んでいた槍使いの冒険者は酒をがぶ飲みした。
「んー、ひとまずは安心だけど、ルルアちゃん大丈夫かなぁ」
唸りながらロロナはテーブルにもたれた。

「生者は死者を悼んで後を追う……なんてよく聞く話よねぇ～」
「パメラぁ」
「でも、ルルアはそんな子じゃないって分かってるでしょう？」
「ぱめらぁ」
いたずらっ子ぽく笑うパメラにロロナの目からはボロボロと涙が零れているが、顔色はまだ明るい。
「あなたは自慢の娘をただ信じていればいいのよ」
触れることは出来ない手で頭をなでるふりをした。

＊＊＊＊＊＊

「定着の具合はどう？」
「うん。バッチリよ～」
ロロナの前には透けてないパメラがいた。
服装も貴族のドレスのような格好ではなく、華美な装飾が付いていないロングタイプのワンピースとカーディガンである。肌の白さと相まって、病弱な令嬢といって出で立ちだ。
人形に乗り移ることで、パメラはようやくロロナの料理を楽しむことが出来た。

眠気が覚めるような、香りが良い香茶と、プレーンタイプのパイだ。
「ロロナはこっちでもパイを作ってるのね～～」
「まぁね！酒場でも私のパイ評判なんだから！」
鼻高々だ。屈託のない満面の笑みにパメラもつられて笑みをこぼす。
「変わらないパイ愛で安心したわ～～」
舌に広がる、懐かしい味。
「ねぇロロナ、ここでの暮らしは幸せ？」
「うん。まぁ、ルルアちゃんたちの事もあるから後悔が無いってことは言えないけど……この世界でも大切な友達が出来たの。ウィズって言うんだけどね、あの墓地で一緒にいた子。なんだかほっとけなくって」
パメラは墓地ではロロナの他に複数人いた事を思い出した。その中の1つがロロナと距離が近かったし会話も出来た。そういえば、ウィズと呼ばれていたはずだ。
「ああ、あの子ね。ロロナを熱心に見てた男の子もいたけど、その子とはどうなの？」
茶色い髪の、どことなく平たい顔した少年だ。ロロナとウィズがくっついている時に少年の視線は特に強く感じた。彼の周りにいた少女達は全員美少女なのにも関わらず、微かに熱を帯びた視線はロロナに注がれていたのだ。もし色恋沙汰に発展しようものならなんとアストリッドに言おうかパメラは悩む。アストリッドは面白がるだろうか。

それとも知らないポッと出の少年を邪険に思うだろうか。確実に言えるのはステルクをからかうネタが1つ増えることである。

「カズくん？んー友達っていうか、同じ町に住む冒険者仲間？」

カズロロなんて無かった。ひとまずパメラは安心した。

ステルク最大のライバルは依然として幼馴染の料理人か幼馴染の首相のままのようだ。

＊＊＊＊＊＊

のっそりと気だるげに起き上り、パメラはアストリッドに声をかけた。

思考の海に沈んでいたアストリッドは数回呼びかけられたことでようやく浮上した。

「ロロナは元気そうだったわよ～」

まず先にパメラはロロナの様子を告げた。

魔王率いる魔王軍の侵略と、それに抵抗する冒険者達。ロロナはその冒険者に所属しているが、冒険初心者が集まる街で錬金術士として働いているから危険はそうそう無い事。

何故か１４歳に若返っていたことを話すと、アストリッドが急に立ち上がって店から飛び出しそうになっていたが、そこは必死になって止めた。

「死後の世界でロロナが今いる世界の神様……一番信仰されている女神様が、ロロナに転生を勧めたそうよ～。まぁ危険な世界みたいだから特殊な能力か、特別な武器が一つだけ貰えるみたいなんだけど～～　ロロナったらそれを『アーランドのアトリエ』にしたらしいわよ～～」

「何?!」

「えっ、ええ。ロロナったら異世界に行っても寂しく無いようにって選んだのかしら」

なんか思ってた想像と違っていた。

パメラは、アストリッドのことだから弄るネタが増えた。と、喜色満面だと思っていたのだが、実際は違った。過去あんまり見た事が無いほど真剣な表情なのだ。何かを考え込むように目は忙しなく動き、くるくると室内を歩き回る。考えをまとめる為かブツブツと小さく呟いていた。

「何かスイッチを押しちゃったかしら～」

雰囲気が変わってしまったアストリッドにパメラが思わずつぶやいてしまうのも仕方無いことだ。話しかけるのも戸惑うほどの鬼気迫る表情。薄暗く狭い部屋に、そんな表情でブツブツとなにか呟きながら歩き回る美女。そんな空気に耐えられないパメラ

は部屋から出たくなった。

ロロナの番外①

アトリエからギルドがある酒場まで、そうそう距離は無い。普段は近道とかはしないロロナだが、今日はウィズを待たせてある。少しでも時間を削りたい為、近道を利用するのは道理であった。

なのだが、そういう時に限ってイレギュラーと言うモノは発生するのである。

「ヒャッハ――！当たりも当たり！　大当たりだあああぁぁぁぁぁああ!!」

ロロナは眩暈がした。

つい最近知り合いになった少年が、女性用下着を振り回して狂喜乱舞するその姿に。

銀髪の少女が泣きながら「いやあああ！パンツ返してェ――!!!」と訴えているから、彼女がその下着の持ち主だということは明白だ。

銀髪の少女の傍らには金髪の女性がいる。友人なのだろう。顔を真っ赤にして怒りで身体が震えているように見えた。

アーランドもだが、ロロナが以前いた世界ではこういった事件や過剰なセクハラ行為

は無かった。師匠からはちょっと恥ずかしいボディタッチとかがあったが、こんな公衆の面前でやるようなことではない。

だからか、このような場面でロロナはどんな行動を取ればいいか分からなかった。

とにかく、カズマを止めたい。知り合いが次の日には牢屋。だなんて衝撃的すぎる。

そんな状況を作らない為に、ロロナは強制的にカズマの動きを止めることにしたのだ。

ドナーストーン（強制麻痺）で。

「ふ、不潔ですぅぅぅぅぅぅ!!」

閑話休題（ハレンチはいけないと思います！）

幸い、感電の衝撃でカズマの手から離れた女性用下着は黒焦げになることなく、本来の持ち主の元へ戻った。

唖然としている二人の少女を置いて、ロロナは回復薬を置き、酒場へ急ぐ。

通り魔みたいな行動ではあるが、女性の敵を討ったのだ。被害者は感謝こそすれ、恨みなどない。強いて言うならば、お礼を言いたかったのだが、我に返った時にはロロナは既に走り去っていた。

「なんだったんだろ……今の」

「さあ。……それにしても」
金髪の少女の顔が蕩ける。まるで恋する乙女のように。頬を赤らめ、身をよじる姿は、抜群のスタイルと美貌が相まって扇情的だ。
「見たか？クリス！今の雷撃を!!　一瞬であの男を黒焦げにしたのだ!!
くぅ～～っ!!なんと羨ましい事だろう！
あの少女は頼んだら先ほどの雷撃を私にも撃ってくれるだろうか!!」
クリスと呼ばれた少女はその言葉を無視することにした。そんなことしても、『放置プレイ』として受け取り喜ぶのは分かっていた。ただ、黒焦げになった少年に、置き去りにされた回復薬を使うのだった。

＊＊＊＊＊＊
ロロナはあれから振り向くことなく、休むことなく酒場まで走った。
数分もすればたどり着き、息を整えながら入店する。カラン、とベルが鳴るが、冒険者たちの喧騒でそれも掻き消された。
見知った顔を見つけると、ロロナは納品より先にそちらに向かうことにした。
「アクアちゃん！」

水色の女神が振り向いた。
傍らには黒髪、紅目の少女もいる。
「ロロナ?……ってなんで泣きそうになってるのよ!」
私のせいなの!?とうろたえるアクアに、ロロナは大きな声で謝罪した。
「ごめんね、アクアちゃん!
さっき、路地でカズくんを見たんだけど、お、女の子の、下着を……その、振り回してたから……えっと、思わず『ドナーストーン』投げちゃって!」
顔面蒼白といっていいロロナの体はワナワナと震えていた。やりすぎた!とも思ったのだ。なにせカズマは黒焦げになっていしまっていたのだから。
だからロロナはカズマのパーティーメンバーのアクアに謝罪した。
ロロナの主張は酒場に響き渡り、カズマの行為は周知された。店内にいる女性たちの目が冷えた。めぐみんとアクアはカズマの所業に引いた。
「……えーっと、カズマさんは路地にいるのね?」
「うん。ギルドから出て右手に行った先の路地……。ほんっとーにごめんなさい!笑いながら女の子の下着を振り回していたから、その、怖くって」
やりすぎといったらやりすぎなのだが、ロロナの見た目はめぐみんと変わらないような幼い少女にしか見えない。それに護衛を通してロロナの人となりはある程度は分

かっている。ワザとではないってことは一欠けらも疑ってはいない。
何より種族は違えど同性である。スキルを習いに行ったのになぜその状況になっているのかは置いといて、深く反省しているロロナを責める気は無かった。
ただ、ドナーストーンの威力は知らないが、ロロナの爆弾の威力を知っているアクア。場所をロロナから聞きだし、その場に向かうことにした。
「一応薬は置いて行ったんだけど、「あら、じゃあ大丈夫よ」
訂正、シュワシュワを飲み直すことにした。
「良いのですか、アクア？」
「だいじょーぶよめぐみん！ロロナが作った薬って効くんだから！」
幸せそうにシュワシュワを飲むアクアだが、一理あった。
大して面識のないめぐみんでもロロナの薬は折り紙つきだと良く聞く。
惜しむらくは持ち運びが不便なことだろう。衝撃を与えると割れてしまう容器に入ってさえなければ、ロロナが卸す薬は爆売れだ。容器さえどうにかすればよいのだが、コンテナと繋がったバッグを持つロロナはその欠点に気づかない。だから改良することもない。
プリースト達も回復魔法の修練度度を上げたいため、なるべくロロナの薬に頼らないようにしているのだ。

カラン、とベルの音がする。
「ちーっす、ただいまー」
「ほら、やっぱり大丈夫だったじゃない！」
「なんでアクアがドヤるんですか……」
「あわわわわ！さっきはゴメンね、カズくん！」
入店したカズマの姿を見つけ、アクア、めぐみん、ロロナが駆け寄った。
どことなく香ばしい匂いがカズマから漂っているような気がしたロロナは、涙目だ。カズマの身体をペタペタと触り、怪我が残ってないか確認していた。
「大丈夫だよ、ロロナ。置いててくれた薬で彼は全快したみたいだよ！」
銀髪の少女が笑いながら話しかけた。
「？あれ……？エリスさ「おっと！自己紹介なしだなんて失礼したね!!あたしの名前はクリスだよ!!」……クリスちゃん？」
訝しんだ表情でロロナはクリスを見つめる。穴が開くように。間近で。
錬金術士にとって、素材の特性を見抜くことは朝飯前である。傷のメイクや髪型の違い等では誤魔化せられないのだ。
一部例外（マスク・ド・G）もあるのだが、ロロナにとってはエリスとクリスは同一人物にしか見えない

のである。

「ん～～～やっぱり、エリスさ「ちょ～～～っと来てくれるかな!!」」

強引にロロナを店内の端っこに引っ張った。

「あれ、どうしたんでしょうか？」

「さあね……ところで聞いたわよ、カズマさん!!!」

しゅわしゅわを奢ってもらいたいアクアは、喜色満面な顔でカズマに迫る。

もし断られたりしたら、とりあえずバイト先でその事件を面白おかしく伝える気満々である。バイト先の主な利用客は主婦の方々だ。暇を持て余した主婦たちの伝達は凄まじい。

翌日にはアクセル中に広まることだろう。

結論として、アクアはしゅわしゅわを1本手に入れることが出来た。